

ローザ
ルクセンブルク

登場人物

ローザ 1

ローザ 2

ローザ 3

ローザ 4

※ローザ 1～4 は別々の人物が演じる。上記を含め 30 人以上の登場人物は、女性 7 名、男性 7 名の 14 人で演じることが出来る。

プロローグ

1919／6／13 ベルリン。レクイエムが聞こえる。手に手に赤きバラを持つて小さな墓を訪れる人々の葬列。

ローザ2 短いわね。

ローザ4 いいえ、長い、長い夢を見たわ。

ローザ3 四十と七年。

ローザ1 人類が見た、途方もない夢の時間の中では一瞬。

ローザ4 いいえ、やっぱり長いわ。五ヶ月も川底に沈んでいたのよ。これでようやく眠れる。

ローザ2 兵隊さんは大喜びよ。

ローザ3 さっきまでこの墓の上でカンカンを踊っていたわ。

ローザ2 あの目立ちたがりやのユダヤ人。

ローザ1 民衆を革命の血の海に追い込んだ赤い女。

ローザ3 チビでびつこの政治家気取り。

ローザ1 おまけにブス。

ローザ4 (笑う) 旋風はくるくるまわるままにまかせ、渴いた汚物はあたりに飛び散るままにまかせよう。

ローザ2 ゲーテだわ。

ローザ3 そういえばあなた、自分のこと窓辺に歌うシジュウカラだって言ったわ。

ローザ1 風に舞うたんぽぽの綿帽子だともね。

ローザ4 違いはないわ。だってほら、私たちもう体が無いんだもの。

ローザ2 ようやく。

ローザ3 自由になった――。

ローザ1 聞こえる？

ローザ4 ええ、聞こえてるわ。

ローザ 2 遠く百年、まだ聞こえているわ。

ローザ 1 心だけになった私が、タンポポの綿帽子に乗って百年後のあなたに今話をしているんですよ。(墓の中に横たわる)

ローザ 2 3 4 さあ、起きてローザ。お話を聞かせて頂戴。

Chapter 1

1886 / ポーランド / ワルシャワ

ベッドの上で目覚める 15歳のローザ。

ローザ 1 人生。私の本当の人生というものは、どこか屋根を超えたずっと遠いところにあるものだとずっと思っていました。人生、私の人生。それを探してというものを求めていつも長い旅をしている。でもそれは、いつも屋根のようなものの影に隠れしまう。……人生は私とかくれんぼしているのです。人生は私のいるところにはいないで、どこか遠いところにいるようにいつも私には思えます。……結局すべてのものが私をからかっていたのでしよう、そうして本当の人生は、おそらくこの幸福な中庭の中に残っていたのかもしれない。

※ 1

リーネ さあ起きて、いつまで夢心地のままにいるの？ (上着を剥ぎ取る)

ローザ 1 何すんのよこのクソババア。

リーネ お生憎さま、卒業式に遅れたっていいのかい？ あんたみたいな跳ねっ返り、お嫁に行けるわけでもなし、きちんと学位をもらっ
といで。

ローザ 1 お生憎さま、わたしの可愛い熊さん。ジムナジウム始まって以来の秀才に何てこと言うんだろ。

リーネ (ローザの頬を撫で) 私もいろんな子供を産んだけれど、その鉄み
たいな自身だけはあんたがピカイチだわ。さあ、行つといで、私の

可愛い天才さん。

ローザ 1

(リーネの頬にキスして) 愛してるわ母さん。行ってきます。

リーネ

行ってらっしゃい!

Chapter 2

朝早いワルシヤワの石畳の町並み。馬車が行き交い、新聞配達、花売り、紳士などがせわしなく行き交う。

ジャミアン

ドーブラエ ウートラ! ローザ!

ローザ 1

ジェン ドブル! ジャミアン!

マリ

(あわててローザの口を押さえる) 馬鹿! 命が惜しくないの? ポーランド語は禁止されているのよ。

ローザ 1

学校の中ではね。ここはポーランドよ、なぜロシア語で挨拶なんかしなきゃならないの?

マリ

仕方がないわ。誰が聞いているか分かりやしない。

ローザ 1

ポーランドよ、この国は、今も昔も、ずっと。

マリ

ほんと、あんたと一緒にや道を歩いてるだけなのに心臓が縮み上がっちゃうわ。

Chapter 3

ギムナジウム。卒業式。幾つもの椅子から起立し、ロシア帝国国歌を斉唱する生徒たち。一人、椅子に座ったままのローザ。

マリ

(小声で) ローザ、先生が見てるわ!

ローザ 1

構わないわ。

教師

ローザ・ルクセンブルク、立て、国家の斉唱中だぞ。

ローザ 1

……。

教師 ローザ・ルクセンブルク！

ローザ1 これは私の国の歌じゃありません。

教師 何だと？ ローザもつかい言ってみろ。

ローザ1 ごめんなさい先生、ご存知でしょうか？ 私ほら、足が。

斉唱が終わり、教師は渋々ローザの元を去る。

ヨボヨボ校長 着席！ これより――最優秀成績生徒の表彰を行います――。

名前を呼ばれたものは、前に――。

マリ ほら、ローザ。

ヨボヨボ校長 最優秀成績生徒――アリーナ・グシンスキーさん――！

ざわざわとする生徒たち。

マリ どうして？ 主席はいつもローザ、あなたなのに！

ヨボヨボ校長 最優秀成績生徒――アリーナ・グシンスキーさん――！

アリーナ ……あ、はい！

立ち上がり、おずおずと、しかし嬉しそうにローザの横を過ぎるアリーナ。

椅子を組み上げて、高く表彰台の階段が作られる。

ローザ1 人が人の上に立つ。――立った人間はその場所を死守して決

して人に譲ろうとしない。一体いつから始まったんだろう？

私が生まれた窓から見た風景は、もう既にそんな風だった。一

体いつから？ 五百年？ それとも人類が生まれた頃から

う既に？ 地上の重力から逃れるように、人垣の階段を上へ上

へと登りたがる。重力から逃れたあの空でも同じなんだろう

Chapter 4

人垣の中から聞こえる拍手。

か？ あのなだらかな水平線が続く平行な海の中では？

——ロシアと呼ばれるこの国はかつてポーランドだった。いや、今でも変わらずポーランドだ。ただ、ありのままの私でいいということがなぜこんなに困難なのだろう。国境線のないあの空ではどうなんだろう。……そうだ、私は鳥でいよう。私はまだ15歳。望むままどこへでも、どこまでも行ける鳥なのだ。

マルチン

(拍手) いやあ、噂どおり、いや、それ以上だね。はじめまして、

ローザ ルクセンブルク。

ローザ1

……私の顔に何かついてます？

マルチン

うん、実に面白い顔をしているよ。典型的なユダヤ人の顔だ。一体どんなお嬢さんなんだろうって、君の事、ずっと想像してたんだよ。ギムナジウムを主席で卒業したそうだね。反社会的運動の傾向有りとして、成績優秀者の金メダルを貰えなかったそうじゃないか。

ローザ1

貰えなくてよかったわ。そんな風に誰かを押しつけて人の上に立つことを望んでいたわけじゃありません。

マルチン

座るかい？ 足が、辛そうじゃないか。

ローザ1

いいえ、結構です。

マルチン

……ジェーン・アダムスも脊椎に障害がある。彼女の兄は精神疾患も持つてる。ルース・ベネディクトは耳が不自由でレズビアンだ。社会的活動をするフェミニズムの女性たちは、みな背負っているものがあるね。君はユダヤ人、おまけにびっこで、女性だ。長い長い抑圧の歴史を君はその小さな体に背負って

るんだね。

ローザ 1

……がっかりだわ。生憎私の家はお金持ちだし、私の足も世界一美しいわ。マルチンさん、あなたが言う事はゴリーキーの「どん底」やトルストイの二、三の小説から引き出してくる『ぶつかり合う氷塊、いてついて広大な平原、重苦しくつめてめそめそした魂』といったブルジョア・ジャーナリストの常套句となんら変わらない、なんて底の浅い物の見方なんでしょう。そんなんじゃ、この全地球上が抱えている問題をいとも簡単に見落としてしまうわ。私は自分を救いたくて何かをしたいわけじゃない……ただ、胸が破れるようなんです。朝、まだ息の白いうちから重い水がめを幾度も運ぶ下男のおじさん、あんな風に鞭で打たれる馬車馬たち、あの痛みがまるで自分の身に起こっているようで、耐えられないだけです。そんなことが当たり前になっっている、この世界に耐えられないだけです。

マルチン

(拍手) 素晴らしい、実に素晴らしい。悪かったね、試すような事をして。君のような人を待っていたよ。(手を差し出す)

「革命的社会主義プロレタリア党」へようこそ、ローザ・ルクセンブルク。

Chapter 5

革命的社会主義プロレタリア党地下アジト。喧々轟々の論議を交わす黨員たち。

マルチン

どれでも好きな本を持って行っていいよ、ニーチェ、ガルシンの小説、ナトキンの詩、カラマーゾフの兄弟は……もう読んでるね。

ローザ 1

(頷く)。

マルチン

じゃあ、これだ。(二冊の赤い本を渡す) カール・マルクスだ。(同じ本を掲げる黨員たち) ローザ、君は今日から革命戦士だ。

ローザ1 ……革命……革命！

「赤旗」のハミングが聞こえる。

マルチン 長い間、ポーランドの民衆は苦しんできた。途方もなく長い間、ロ

シアに支配され、言葉を奪われ、絶対主義に踏みにじられあえいできた。どれほど多くの労働者たちがその重い車輪の下に踏みにじられてきたろう、ローザ、ポーランドの開放は、まさに絶対主義の支配から民衆を解放することなんだよ。それ以外に祖国の解放はあり得ない。ローザ、その日は近い。それは虐げられた人々が上に立つ日だ。想像してごらんローザ、誰にも支配されない真に新しい労働者の国家の誕生だ。それを成し遂げるにはローザ、革命以外に方法は無い。革命を！ 全人類の兄弟たちが手を繋ぎ、プロレタリアートによる革命を！

ローザ1 革命を……プロレタリアート革命を！

マルチン 祖国万歳！ 革命万歳！

赤い小さなハンカチをひらひらと、赤旗の歌を踊る党員たち。その中で熱心にマルクスを読みふけるローザ。

Chapter6

扉を激しく叩く音。ローザの自宅。

ジュリアン マルチン、ローザ！

ローザ1 (扉を開く) さあ、早く入って、一体どうなってるの？

ジュリアン 駄目だ、アジトは憲兵に入り込まれて滅茶苦茶だ、もう五人も逮捕者が出てる、ローザ、君の名前も憲兵のリストに載ってる、投

獄されればすぐシベリア送りだ、何年も出ては来れないだろう。

マルチン ローザ、今すぐポーランドを出るんだ。

リーネ まあ！　なんてこと！

エリアス いやじゃ！　ローザはどこにもやらんぞ！

ローザ1 大丈夫、心配しないで父さん、母さん。きっと外国のほうがここよりずっと安全よ。そこでうんとお勉強して、必ずポーランドをロシアから開放してみせるわ。

リーネ 一体どこで間違ってしまったんだろう。私はただ、お前に普通のいい奥さんになって欲しいだけなのに。

ローザ1 母さん、人には向き不向きがあるわ。

エリアス 娘が命を狙われるなんて！

ローザ1 父さん、私の命で革命を推し進めることができるんなら、私、進んでそれを投げ出してみせるわ。

エリアス なんて事を！

ローザ1 ああ、ごめんなさい、心配しないで。必ず、必ず帰ってくるわ！

リーネ ああ！　ローザ！（抱きしめる）

ジュリアン やばいぜマルチン、逃亡ルートがバレたらしい、畜生！　きっと内部にスパイがいやがるんだ！　どうする？　逃げられないぞ、床下に、どこか隠れるところは？

マルチン 床板を全部はがされるか、家ごと燃やされるさ、ローザ、聞いてくれ。知り合いに信頼できるカトリックの神父がいる。ローザ、君、クリスチャンのふりはできるかい？

エリアス なんだって？　われわれはユダヤ人だぞ！

マルチン 神父にユダヤ人の少女がカトリックへの改宗を望んでいると話してみる。家族の猛烈な反対があつて、国境を越えなければ改宗できないと頼んでみるんです。きっと協力してくれる。お嬢さんの命とどちらが大切ですか？

ローザ1 ……分かった、やってみる。アーメン。

リーネ ローザ！

ローザ 母さん、私はこの中庭を飛び出して、世界に行くのよ。

馬車を曳いて、神父がやってくる。レクイエムの歌声。

ローザ1 神様、どこにいるかわからないけど、国も国境も関係ない名も無

い神様。どうぞ私をお導きください。私と、この世界をお導きく
ださい。国境を越え、人々が望むまま、ありのままに飛ぶ鳥にな
る空へ、どうぞ、どうぞお導き下さい。

馬車の荷台に乗り、国境を出るローザ。